共に生きる営みのあるインクルーシブな社会を！

ホームレスの３割以上に障害があるといわれているが、新聞書評の「障害者が路上での暮らしを余儀なくされていること自体、「共生」の対極にある「排除」の原理がなお、社会を支配していることを示している。本書は、その厳しい現実を描きながら、同時に、その現実に希望の風穴をあけてくれる。」が目にとまり、「ホームレス障害者～彼らを路上に追いやるもの～」を購読した。

著者は、盲学校、養護学校の校長も務めた長年障害児教育に携わった教師であり、また、教職の傍らある教会の伝道師でもあり、教会でホームレスの人々への支援の活動にも２０年間携わっている。

その支援活動で出会った障害のあるホームレスの人々との係わりから、インクルーシブな教育と社会のあり方を探ったのが本書であった。

障害児教育の専門家である著者だけに、障害者が路上での暮らしを余儀なくされた数々の事例に触れながら、障害児教育の問題点やあり方に鋭く迫っている。

障害者がホームレスにならないために、「生まれた時から、学校を卒業し、社会生活をして老いていくまでの期間、すなわち一生涯を、各関係機関が協働して支援するシステム」が必要と説き、著者自身は、行政とも連携しながら、地域に「労働・福祉・教育連絡会」を立ち上げた経緯と、その経過にも触れられていた。

著者は、「障害のあるなしにかかわらず、ホームレスの人々は、単に職業を失い、住むべき家を失った人々ではない。労働や生活の糧をどう得るかということを含めて、現在の社会で生きることが困難な人々である。生活そのものを支えるシステムがなければ、生活保護を受けても結局その人の生活は破綻してしまう。障害のある人々に対する生活支援をホームレス支援プログラムの中核に据えることこそが、必要不可欠ではないか。」と言う。

障害児・者の福祉関係で、「共生」とか「共生社会」といった言葉が使われるようになって久しいが、単にインテグレーシブな社会（単に統合の社会）ではなく、真の「インクルーシブな社会（共に生きる営みのある社会）」とはどういう社会かを、事例と支援活動を通して具体的に理解するには打って付けの本書であった。

阿部幸泰　　（2013 年 1 月 19 日　記）